

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4391100098		
法人名	社会福祉法人 順風会		
事業所名	グループホーム 西城園		
所在地	宇土市 戸口町906番地		
自己評価作成日	平成27年9月30日	評価結果市町村受理日	平成27年12月3日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」
所在地	熊本県熊本市中央区水前寺6丁目41—5
訪問調査日	平成27年10月28日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

集落の中にあり、近所の方もいつも声掛け出来る距離にある。海岸にあるため、台風などの自然災害についてはこれまでも2回ほど全員避難を行っているが、区長さん等も避難した後の見守りなどとしていたり連携を取っている。運営推進会議にも地域の近所の方も委員として参加いただき、いつでも来園いただけるような雰囲気作りには気をつけている。利用者の方にもそれぞれ好きに生活していただけるように、気を配っている。希望に応じて買い物などにも出かけていただき、本体の特養のイベントや、ボランティアで演芸等の行事がある時には参加をして交流を行っている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームは瑠璃と珊瑚の2ユニットに分かれており、利用者18名が職員と共同生活をしている家庭的なホームである。職員は利用者個々の介護度・生活歴・病歴・生活環境・経済力等を把握し、自分の親と同居のような気持ちで衣食住の全てに関わっている。意思表示が困難な利用者に関わり続け、できないとあきらめず、できることを探して、その時・その場で幸せを感じて欲しいという思いで接している。機能的にケアをするのではなく、人間的に働きかける事で利用者の笑顔を引き出しでおり、仕事を楽しむ余裕が感じられた。又、施設としての制限がありながらも、利用者の思いを叶えてあげられる自由があるのがグループホームだと捉えている職員もあり、理念の「敬愛の精神・奉仕の心」を実践している事業所だと言える。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)		1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。〕

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	全職員が事業所の理念『敬愛の精神 奉仕の心』を理解し、実践につなげるとともに、実践からもこの理念の意味を感じる事が出来るようになってきています。	法人の理念である「敬愛の精神・奉仕の心」をそのままホームの理念として、利用者一人ひとりの背景にある人生に思いを馳せ、尊敬の念を持って接する事が心掛けられている。又、私情を持ち込まず、奉仕の心で、個々のニーズに合わせたケアの実践が行われている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域とのつながりは、散歩などで挨拶するなど日常的な交流を大切にしています。また、ご近所の方の訪問があったり、毎年、地域の祭り(いか祭り)に参加したり、法人の行事に招待するなどの交流を深めています。	理事長自ら地元の人で、「地域密着型事業所」としての機能を充実させたいとの意向が強く、開設当初から地域との交流に力が入れている。尚、区長や近隣住民も運営推進員として協力しており、各種イベントへの参加や、ボランティア訪問も積極的に受け入れている。更に、ホームの会議室を開放し、地域の縁側的な存在として、地域住民が気軽に立ち寄れるホームを目指している。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	「西城園新聞」や状況報告書で情報を発信するとともに、見学や相談があるときは入居以外のことでも気軽に相談してもらえるような対応を心がけています。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ご家族・区長・老人会会長・地域包括支援センター・行政・地域の方などに参加して頂き、サービス内容や事故報告などを行うとともに、自然な会話から、ご家族の意見を引き出せるような談話の時間を作っています。	委員は、老人会長・民生委員・地域住民・両ユニットの家族代表・行政・地域包括で構成され、2か月に一度開催されている。委員からの要望で、詳細な入居状況と行事報告・事故及びヒヤリハット報告等が、施設から説明され、活発な質疑応答が行われている。又、職員が施設内外で受講した研修内容や、利用者の日常を撮った写真も「西城園便り」で紹介され、各委員への更なる理解を求める努力が見られた。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議には、地域包括支援センターや行政担当者から毎回参加して頂き、グループホームのサービスだけでなく、様々なサービスの内容の説明やアドバイスを頂いています。	市主催の各種研修会や地域密着型事業所の説明会等に、積極的に参加している。今年度は、生活保護入居者受け入れの為、頻回に訪問や電話で市担当者と情報交換をし、連携を深めている。又、運営推進会議録を毎回、市長あてに提出しており、信頼関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体状況を共有し、事故予防の目的で利用者にとって、どの方法が一番のケアに繋がるか、その場合は拘束になるか？を常に話し合い、家族の理解を得てから、現状を報告して、拘束にならないように勤めています。	身体拘束マニュアルを熟知し、どんなことが拘束になるか、ケアの中で状況に応じて職員間で話し合い、その都度検討しながら、取り組んでいる。言葉による拘束の弊害もその場で職員間の気づきで、注意し合う雰囲気作りが出来ている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束と高齢者虐待は職員がもっと勉強が必要だと痛感しているので、今年度は集中して内部・外部含めて研修を進めて行きたいと考え検討中です。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	後見人制度など必要な方には口頭で説明をしています。職員がもっと勉強が必要と感じているので、今年度は内部・外部研修を進めて行きたいと考え検討中です。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約や解約の際はもちろん、改正の際も十分な説明を行っています。その際に不安や疑問が発生した場合は説明し、理解していただけるように努めています。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議の中でも、意見や要望について話し合い、職員にとって新しい発見や気づきになっています。	推進会議に、各ユニット代表の家族が出席し、家族の立場での発言や感謝の言葉があり、他委員の理解に繋がっている。面会は多く、滞在時間も長い家族が多く、食事介助を行う家族もあり、居心地の良いホームである事が伺えた。体調面で不安がある家族には、「ケース記録」や医療機関受診状況を説明し、安心を得ている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	会議やミーティング等で意見を出せる場を作っています。管理者は、現場にいる時間を多く持つ事で、職員の思いを知り、職員が意見を伝えやすい雰囲気を作っています。	月1回、2ユニット合同会議が開催されている。日々のケアの中で、利用者に対するケアの違いが見受けられた場合は、ミニミーティングで話し合い、ケアの統一が図られている。職員は、夜勤者・日勤者共に早めに出勤しているので、その交替時間を活用し、無理なくミーティングの時間が確保出来ている。又、申し送りノートの他に「つぶやきノート」を作り、職員は日常の様々な思いをノートでつぶやき、共感を得たり、アドバイスを受けたりすることで、信頼関係が築かれていることが伺えた。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年に一回(又は適宜)、理事長・所長・職員との個人面談があり、個々の自己評価や意見を吸い上げるように努めています。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修はプリントを回覧し、認知症ケアの研修や介護研修に積極的に参加してもらい、職員の質の向上に努めています。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡協議会では、管理者同士が意見の交換の場があり、情報の交流が出来てネットワークが構築されています。連絡協議会主催の合同の勉強会も定期的に行われており、職員同士が勉強会を通じて、さらに交流を深め、サービスの質の向上に努めていきたいです。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用者が「どうしたいのか?」を常に考え、言葉や表情から読み取れるような関わりを持ち、初期段階では慣れていただくまで、その方を知る・という視点からご家族にも協力していただき、見守り・ケアに努めています。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用を決めるまでの経緯と家族の本人への思いを受け止め、共有しています。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	まず、今必要な支援を導入しサービスの提供を行っています。その後、新たにサービスが必要となった時は、その都度本人家族も含め話し合い、早めのサービス導入に努めています。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	介護する・されると関係性ではなく、同じ空間・同じ場所で一緒に生活しているという意識を持ち、必要な時に手を貸したり借りたり、関係を大切にして、楽しさや喜びを分かち合っています。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族にしか出来ない事があることや、面会の際などには、ご本人さんの表情や言葉がいつもと違う事をお伝えしています。又、毎月の近況報告や写真を家族に郵送する事で喜んでいただいています。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会は、いつもでもどなたでも出来るように声をかけています。家族と外出などがあります。	地域からの入居者が多い為、馴染みの人の訪問は多い。ホーム近くに移動販売車が来ると、利用者は職員と一緒に出掛け、買い物に来た馴染みの人と出会う機会となるような工夫が見られた。又、墓参りに行きたい利用者を家族に繋げたり、母体特養主催の「西城園祭」にみんなで出かけ、地域の人と触れ合う機会を作り、旧交を温めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の人間関係や身体状況を把握し、職員が利用者の間に入る事でかわりが継続する事も多くあります。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了後も関係性を大切にし、相談などが出来やすい環境を作り出しています。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者・家族の希望にあわせた支援をしています。日常の動作や言動から気持ちを汲み取るようにしています。	寝たきりの人や、思いや意向をうまく伝えられない利用者の、生きる権利を奪うことは出来ないという信念のもと、その人の生活スタイルを尊重したケアに努めている。家に帰りたいが子どもに迷惑をかけたくない思いを汲み取り、家族へ働きかけて思いを叶えるなどして、利用者に喜ばれている。又、面会が少ない利用者には、表情で察知し、外へ出掛けるなどの配慮も見られた。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族から情報収集するとともに、本人と普段の会話の中から、生活歴を把握し、日常の支援につなげています。得られた情報は記録に残し、職員間で共有し、ケアに役立てています。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者の生活歴を踏まえた上で、今の心身の状態に合わせた支援を行っています。モニタリングで状況把握を行い、プランに反映させている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月の職員会議や日々のミーティング・申し送りで現状や困難事例を話し合い、意見を出す事でチームとして統一したケアにつなげています。また、家族と話す機会に加え、状態に合わせて医師も含めたカンファレンスを実施しています。	介護計画作成担当者を中心に、6か月の短期目標と1年の長期目標を立てている。担当制で、3か月に一度評価とアセスメントを行い、面会時に得た家族の意見や医師からの情報も含めたカンファレンスを実施。「つぶやきノート」に書かれた内容がケアプランに反映されるケースもあり、利用者個々に応じたケアプランを作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	PDCAサイクルを行い、介護計画の見直しもスムーズに行えるようにしています。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	今生まれてくるニーズに対応できるように、普段から様々な視点で観察し、支援を追い分けています。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	近所のご婦人の方など、頻回に事業所を訪問して下さり、利用者とのコミュニケーションをとっていただいています。昔話をおしゃべりする事で心身の力になっていますし、暮らしを楽しむ支援になっています。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	連携をとる病院はありますが、本人・家族の希望でかかりつけ医を決めています。受診の際は本人・家族の意思に沿って病院受診に付き添っています。	毎朝、朝食後にバイタルチェックで健康状態を把握している。利用者の多くが「みどりかわクリニック」を主治医としており、月1回の定期検診とニーズに応じた往診を受けている。また、訪問看護を利用する人もあり、ホームと本人・かかりつけ医との連携が十分にとれている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	事業所内の看護師と訪問看護師の連携もあり、一人ひとりの既往症や内服薬など観察点を把握してもらっています。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	退院時にかかりつけ病院より情報提供を頂き、日常生活の情報などを集め、入院中は職員も面会に行くなどして退院時がスムーズに行くように行っています。入院時は日頃の様子など病院に伝え治療に役に立つようにしています。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時よりカンファレンスを行うなどして、本人・家族の意向を確認しています。今後考えられる心身の状況を話す事が出来、重度化した場合は協力医と連携をとって受け入れる方向で話が進んでいます。運営推進会議でも内容のお話をする事が出来ています。	ホームとしては、看取りまで行う方針であり、入居時のカンファレンスで確認を取っている。終末期が近づいたと判断された場合、所長・管理者・看護師が協力し、家族の意向を十分尊重した上で、医師との連携を密にし、本人にとってより良い看取りとなるよう、支援体制が構築されている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時のマニュアルを活用し、全員が対応できるように準備しています。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に二回昼・夜間想定 of 避難訓練を実施しています。台風や水害がある時は、法人本体の特養に避難できるようになっています。	消防署立ち合いの元、年2回避難訓練を実施している。海に近い為、水害の避難訓練にも力を入れ、今夏の台風時は、母体特養に全利用者が避難し、一泊した朝、朝食後帰園した体験は、職員・利用者双方にとって防災意識を高める良い機会となったと思われる。又、推進会議の中でも家族から、大雨時の避難について質問があり、ホームから対応策が述べられている。家族も納得し、協力を申し出ており、災害対策に真摯に取り組んでいる事が伺えた。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者一人ひとりの人格を尊重しながら、個々にあわせた対応を行っています。その方の人格を受容し、状況に合わせた言葉掛けで、安心していただくケアに心がけています。	利用者個々の性格や環境(生活)等、その人の人格を思いやって、対等の関係で寄り添いながらのケアを心掛けている。特に、入浴時や排せつ時の羞恥心には配慮を怠らず、ドアの開閉や、衣服の着脱に気配りが見られた。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常の様々な場面で、利用者の気持ち、考えがあつての行動になるように、選べる行動を提供して支援しています。言葉で選択できない利用者に対しても表情や感情に注意して、利用者の気持ちを汲み取れるようにしています。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事や入浴・就寝など、利用者の希望以外にも、その日の体調を踏まえて利用者のペースにあった生活を送っていただいています。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴時・起床時に、利用者の希望で服装を選択していただいています。どんなときも自分らしい服装でいていただけるように支援しています。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者の嗜好を把握して、個別に対応しています。同じ食材でも調理法を工夫すると食べられる利用者もおられます。病気のために固形物が食べられなくなった利用者に対し、工夫しながら食べられる物を探したり、美味しく感じる事が出来る雰囲気作りをしています。	特養の管理栄養士が作成したメニューに添った食材が届けられており、それを両ユニットで分担して調理している。利用者の嗜好を把握した個別対応もとられており、食べる意欲の増進と楽しみに繋げている。食事介助も一つ一つの食材を説明しながら、「おいしい？」と声掛けし、その人の食べる速度に合わせた対応が見られた。特養の行事と併せた食事は、おせち・ひなまつり・七夕の素麺・クリスマス等の催事食となり、利用者にとって、季節の移り変わりを感じさせる特別な日となっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者の普段の食事摂取量を把握し、足りない時は間食で補って、栄養の確保をしています。水分量も利用者の普段の摂取量を把握し、脱水ならないように支援しています。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	起床時のうがいや毎食時の歯磨きを確実に介助を行います。定期的に訪問歯科衛生士に口腔内の観察・ケアをしてもらい、口腔ケアには特に力を入れています。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	定期のトイレ誘導ではなく、排泄パターンを把握し、言動や行動からトイレのタイミングを察知し、健康・食事・水分摂取などを把握し、出来るだけトイレで排泄していただく支援をしています。	介護度が異なる一人ひとりの利用者には、昼間はおむつやリハパン使用でトイレに誘導し、夜間は、おむつを使うかポータブルトイレを利用するか、試行錯誤しながら排泄の自立を目指している。又、10時、3時の水分補給も怠らず、スムーズな排泄に繋げるよう配慮している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	出来る限り下剤は使用しないように心がけ、空腹時の牛乳や繊維のある食材を多く取りいれて、自然な排便があるように心がけてます。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	予め予定は作っていますが、そのときの希望や状態に合わせて、入浴していただいています。入浴は1対1で行い、湯船の中でゆっくり話される雰囲気を作り、歌や談話・時には悩みを打ち明けられる場所になっています。湯船に花びらを浮かべたり、菖蒲を入れたり、季節のお風呂も楽しんでいただいています。	週2～3回の入浴を基本としているが、利用者の希望を尊重した入浴支援となっている。その人の好みに合わせた湯加減にし、マンツーマンで世間話をしながらの入浴は、利用者にとって心身共にリラックスした時間となっている。また、時には薔薇湯で気分転換を図る等、入浴の楽しさに繋げている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者の健康状態に合わせて睡眠状態を把握し、休息を取っていただいています。静かな居室ばかりが安息の場所ではなく、人の声が聞こえるリビングのソファで休んでいただいている事も多くあります。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	お薬手帳や処方箋を管理し、いつでも情報が見られるようにしています。服薬までに二重のチェックを行い、飲み込まれるまで職員が確認を行っています。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者の能力に合わせてそのやり方が継続できるよう支援しています。野菜の皮むきなどは家事をいていた婦人であればどなたも経験済みである為に、包丁を使って気分転換野菜の皮むき・カットを行われているいます。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節の花見など大型自動車以外出する事も多く、集団で外出する事もありますが、利用者ひとり一人の生活歴や嗜好に合わせています。外出など気分転換を行っています。	三角西港へのドライブやアジサイの花見やもみじ狩り等、可能な限り外出機会が作られている。国立南病院絵画教室に参加する利用者もあり、送迎で個別対応にも取り組み、利用者の満足を得ている。又、宇土マリーナや宇土シティへの買い物等、利用者の希望に応えている。日常的には、園の周囲の散歩や日向ぼっこで潮風に浸る等、閉じこもらない外出支援が無理なく行われている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族の了解の下に、現金を事務所で預かりしています。必要に応じて、職員と一緒に外出して、自分でお金を支払い、希望のものを買い物できる支援を行っています。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者の希望時に電話を使用していただいています。自分でかける事の出来ない利用者には、職員が代わりにかけたり、伝言したりの支援を行っています。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食堂兼リビングは自然とご利用者が集まる場所になっています、料理の音やにおい・談話やテレビの音なども居心地よい環境となっています。	玄関を入ると、正面に開放的な事務室があり、左右に同じ作りの珊瑚と瑠璃の2ユニットがある。広いワンフロアには木製のテーブルが備わり、海が見える窓側にはゆったり座れるソファが置かれ、ゆっくり爪を切っている利用者や、畳スペースでくつろぐ人も見られた。リビングの広い壁に掛けられたピンク色の布製手作りカレンダーが目をひき、両ユニット共、ゆったりした空間に利用者それぞれの居場所が作られ、落ち着いた雰囲気となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングのソファが人気で、利用者同士で仲良く腰掛けておられます。利用者同士で座ることに安心されたり、自由にそのときの状況にあった場所を選んで頂いています。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には自宅で使用していた家具や身の回りのものを持っていただく事で、入居時の不安を少しでも軽減するようにご家族にお願いをしています。ご家族との写真や手芸作品を飾られ、お一人おひとりの温かみのある居室になっています。	居室は、1番地・2番地と番地が表示されている。各居室に作り付けの机のような台があり、その上に家族写真や造花・ぬいぐるみ等が飾られた部屋が見られた。また、家族に能面を作る人がおり、作品を壁に掛けてある部屋や絵の具を使い本格的な絵を描いている人等、個性が活かされている居室作りとなっており、家族や職員の気配りが感じられた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物内は全てバリアフリーの建築であり、手すりの位置も工夫されています。片麻痺があってもどちらかのトイレの手すりを使って排泄が出来るようになっています。		